

2年1組

自分たちのジャムを食べてほしい ～もっといろんなジャムを作りたい～



「2組さんに食べてほしいジャムってどんなだろう」

「2組さんに食べてもらうジャムを完璧にしたい」という子どもたちの声から始まった追究。味、におい、見た目、食感、ジャムらしさ、という5つの視点で考え始めたものの、子どもたちの中にある「こうしたい」を実現するためにはどうしたら良いのか、具体的な方法について行き詰まっているように感じました。「そっか」「なるほど」と思えるヒントが何かないかと思い、ジャムを作っている方、お店の方を新たに調べる中で、小布施にある「マロナップル」というお店の社長さんである酒井さんに出会いました。

お店を訪ね、社長さんに連絡をとっていただき、子どもたちが作ったジャムを食べて感想をいただけないかお願いしたところ、快く引き受けてくださいました。そして、9種類全てのジャムを食べていただき、一つ一つのジャムに対する感想をいただきました。味の感想はもちろん、食感や香り、ジャム感、見た目についてそれぞれの班で「こうしたい」思いについて答えていただき、そうした感想をまとめたお手紙を子どもたちに渡すと、話し合いが始まりました。



「ジャムをドロツとさせたい」と思いながらも、りんごジャムではなかなか難しく、困っていることを酒井さんに伝えると、「鍋で煮ている時に蒸発してしまう分くらいの水を入れるといいよ」と教えていただきました。今まで作ったジャムは素材そのものがもっている水分が多く、水を入れなくてもドロツとなりやすい、むしろ、水っぽくなってしまいう方が多く、水を入れるという考えがなかったので、わたし自身が驚きました。子どもたちもその事実を知り、「水って入れていいんだ」「次は水を少し入れてみよう」と話すAさん。加えて、「ドロツとさせるためには、りんごならすりおろしてみるのもいいね」とも教えていただきました。Bさんはその事実を知り、「今度はおろして作ってみたい」とメモに書いていました。また、香りを残すポイントとしては、火を入れて、味をつける第2次行程と呼ばれる部分の時間をいかに短くするかということでした。1つのグループが電子レンジを使って作っていることを伝えると、そのグループのジャムを食べ、香りを確認した酒井さんが、「レンジを使うと早く火が入るので、香りが逃げにくいから、この方法はいいね」と教えてくれました。それを聞いたCさん、Dさんは、「次はレンジを作ってみようよ」とグループの友だちに提案していました。

子どもたちが意見を交わす中で、私はひとりひとりに温度差を感じました。思い描くジャムをどうしたら作れるのかを考える子がたくさんいる中で、グループでの話にあまり参加してない子、自分の考えを伝えずに、黙っている子の存在に気が付きました。その子たちの思いはどこにあるのかと知りたくなり、声をかけると、話合いにあまり参加していない子は、「次はこうするんだ」と自分の中でやりたいことが決まっていました。黙っている子は「美味しいジャムか」と、「美味しい」の中身を考えて立ち止まっていました。その姿や様子から、ジャムを作るという活動は同じでも、それに向かう気持ち、こだわりたい所はみんな違うのではないかと私自身立ち止まりました。それぞれにジャムを作りながら、みんなで意見を伝え合いながら、専門の方に意見をもらうことでジャム作りを見つめる子がいれば、自分の思い描くジャムをどんどん作りたいと思う子、ジャムを食べる人の美味しいに立ち止まる子、これからのジャム作りをどんな風に進めていくか、子どもたちのジャム作りに対する思いを改めて聞いてみたい、そんな風に考える時間となりました。

「2組さんに食べてもらおう」

どんなジャムにしよう、どうやったらそのジャムになるだろう。そんな話し合いを経て作った9種類のりんごジャム。どんな風にしたら2組さんが十分にジャムを味わうことができるのか考え、EさんとFさんが提案してくれた「お店屋さん」を作ることにしました。教室の中にグループ毎机をつけて、作り方や材料などを書

いたポスターを貼りました。どうして説明をするのではなくポスターなのか。それは、1時間の中で9つのグループが説明をしている時間をとると、食べる時間が少なくなってしまうという問題に気がついたからです。そこには食べてもらう「こと」を大切にしたいという思いがありました。そこで、「ポスターにして読んでもらえばいいんだよ」というTさんの提案に賛同し、作り方や材料はポスターで伝えることにしました。これで、ジャムをたくさん食べてもらえる！と、試食会の時を迎えました。「私はここのジャムが好き」「甘酸っぱくてりんごの味がする」そんな声を聞きながら、誇らしそうにするGさん。もっと食べてとスプーンに乗せるジャムが心なしか増えていきました。そんな様子を見て、自分たちも食べたくなった1組さん。作った時には食べることでできなかった他のグループのジャムの味に夢中になっていました。



「自分のジャム」

自分たちが作ったものを自分たちで食べて、美味しい、嬉しい、と思うところから始まったジャム作り。ジャム作りを重ねる中で、作ったジャムを誰かに食べてもらいたくなり、また、その評価が欲しくなり、評価に喜びを感じる子どもたちの姿がありました。また、子どもたちの物づくりの世界が自分たちから家族や友達、ジャムを製造している方へと広がる中で、最近、子どもたちが目指すものが少しずつ変化してると感じるが多くなりました。

2月、以前も子どもたちの中から聞こえてきた、「売りたい」の声が再び聞こえてくるようになり、改めて「どうして」「なんのために」と問い続けていくと、「一番の目標はさ、食べてもらうことだね」とHさん。「売って、お家の人を買ってもらったら家で食べたい」とTさん。「学校では、クラッカーと一緒にしか食べてないから、家ならパンやヨーグルトと一緒に食べられるから、食べたい。」とIさん。「食べてもらった感想を聞きたい」とJさん。「食べ比べをして、もっと美味しく作るヒントをもらいたいから試食がいい」とKさん。そんな会話が続けていくと、「食べてもらえるならどっちでもいいよね」とLさん。子どもたちが自分の思いを語っていると、私のところにやってきたMさんが、「売らない。別に売らなくても、作ったジャムを家に持って帰ればいいじゃん。学校でも食べればいいじゃん」と言いました。新たな意見をみんなに投げかけると、「いいね。賛成」「それなら学校でみんなで食べられるし、家にも持って帰れる」と、売る、売らないの2択だった選択肢から別の選択肢が生まれ、あっという間に「みんなで食べて、持って帰ろう」となりました。

子どもたちの思う「売りたい」の元になっている思いは「食べて欲しい」から変わっていませんでした。より多くの人に自分たちのジャムを伝えたいという思いが強くなり、それを実現するため、でも、自分たちもみんなで食べたいという思いの中で揺れ動くものがあつたように感じました。食べて欲しいはもちろん、自分たちも食べたいという素直な思いは子どもたちがもつ願いなのだと感じました。



そんな思いを再確認し、3月、2年生としては最後のジャム作りをしました。せっかくだから自分の作りたいジャムを作ろうと、作ってみたかったプリン、キウイ、パイナップル、みかん、ミルク、いちご、栗、の7種類のジャムを作りました。最後は少し多めに作って一人一瓶を持ち帰りました。今年度、実現には至りませんでしたが、子どもたちの「売りたい」の想いの先にある形にも近づけようとラベルも作りました。瓶に詰めた後、家庭科室でその瓶を片手に持ちながら、道具を片付ける姿、ラベルを作りながら自分のジャムと決めた瓶をずっと持っている姿、置いてある瓶を大切に眺め、触っている姿に、できた62個のジャムはそれぞれが特別なジャムでした。子どもたちとジャムやジャム作りを通して、悩んで、困って、考えて、作って、食べて、美味しいと言って同じ時間を一緒に過ごせたこと、ジャムを追究した1年間はとても幸せな時間でした。